「森銑三刈谷の会」だより　No. 25

発行　2023/11/18（月刊・メールでの投稿歓迎）
例会　第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由
バックナンバー 刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp

表　　森銑三『赤い鳥』掲載作品

発行年月	森銑三作品	分類	ページ
1927年1月号	伊藤圭介の話	歴史物語	106-113
2月号	伊藤圭介の話	歴史物語	86-91
4月号	葛飾北斎	伝記	106-111
6月号	小泉八雲	伝記	76-79
7月号	通し矢の話	伝記	52-57
9月号	光悦と松花堂	伝記	106-111
10月号	本多平八郎忠勝	伝記	98-103
12月号	酒井忠勝	伝記	90-93
1928年1月号	谷風梶之助	伝記	120-123
5月号	光琳と乾山	伝記	80-85

第25回（2023/10/21）『赤い鳥』の森銑三作品を読む

参加12人　　神谷 磨利子

第23回森銑三刈谷の会（2023/7/15）「供養塚の二坪半の家」の発表において、供養塚時代（1926-28）に隣人として暮らした宮原晃一郎の紹介で森銑三の作品が『赤い鳥』に掲載されるに至った経緯を話題にした。銑三作品は10回9編の歴史物語や伝記が掲載されている。今回はその中の最初の作品「伊藤圭介の話（歴史物語）」（1927/1-2月連載）を読んでみようという会であった。

伊藤圭介（1803-1901）は名古屋の生まれであり、刈谷藩士・宍戸昌（さかり）（1841～1900）がその門人であった（参考：筒井稔「旧刈谷藩士　宍戸昌」『かりや』20）から、この会で取り上げるにふさわしい人物でもあった。

物語は「長崎に来てゐる博物学者シーボルトが、将軍様にお目にかゝりに江戸へ出る途中、熱田を通るといふことを、耳にした伊藤圭介は、ぜひとも出かけて行つてシーボルトに会ひたいものだと思ひました」という一文で始まる。シーボルトが日本に渡ってきた理由、また、医者であり日本の動植物の研究をしていることを説明し、いよいよタイトルの「伊藤圭介」の紹介に入っていく。父は医者であり、本草に明るい人で、その影響で圭介も医学・漢学・本草学の勉強をし、さらにオランダ語も学んでいたこと、そして24歳の時に、冒頭の一文にあるように熱田までシーボルトに会いに出かけたことを子どもの理解が行くように順に描いている。

その後、長崎のシーボルトの鳴滝塾で学んだこと、シーボルトからもらったツンベルグの『日本植物書ママ』を大切にし、その本を元に『泰西本草名疏』を著し、その中で「めしべ」「おしべ」の名を初めて使ったことなどを記している。名古屋に戻ってから西洋医として活躍し、種痘を始め、コレラの予防策を人々に教えたこと、その間にも植物学の研究を怠らなかったこと、長崎で別れたシーボルトと35年ぶりに横浜で再会したこと、明治になってから文部省の役人・大学の教授に就き、植物学の書物を著し世界的な評価を得て99歳の長命を終えたことを紹介している。

ところで森銑三は「伊藤圭介の話」を『赤い鳥』に発表する以前に、市立名古屋図書館時代（1923/4-1925/3）に『新愛知』に連載した『偉人暦』の中で「伊藤圭介」（1924/1/20）を取り上げている。会の当日、中公文庫『偉人暦』上（1996）の1月20日の項を読んでもらったが、17行（1行38字）の短い文章にまとめられた話を耳で聞いていても、『赤い鳥』で子どもを対象に分かりやすく描かれた文章を読んだ後だったので、参加者からその内容がよく分かるという感想が上がった。

『偉人暦』の「伊藤圭介」の中には「憂国家として『乍川（させん）紀事詩』を校刊して時事を諷し」と書かれている。『乍川紀事詩』（1846）は沈筠（しんきん）輯『乍浦集詠』より伊藤圭介が抄出した詩集で、乍浦は阿片戦争の際に英軍により陥落せられた地。詩の多くは戦争や殉難者に言及しているという（西尾市岩瀬文庫のデータベース参照）。この書は村上文庫にも所蔵（伊藤錦窠［きんか］の号）されているので、銑三は村上文庫の整理の時（1916年）に眼にしていることになる。「伊藤圭介の話」の中にも書名は書かれていないが、外国との戦争を戒める内容の本を訳して刊行したと書かれている。

1916年村上文庫での『乍川紀事詩』との出会いから、1924年名古屋図書館時代に圭介の命日1月20日の『新愛知』に載せた「偉人暦」の「伊藤圭介」を経て、1927年『赤い鳥』1月号の「伊藤圭介の話」へとつながっていたことが分かる。それだけの期間、温めてきた題材だったからこそ子ども向けの作品とは言え、「伊藤圭介の話」には深い思い入れもあり、2か月連載の長さになったのではないだろうか。思い入れの筆頭には長崎で圭介と共に学んだ高野長英を意識しているだろう。銑三は後に圭介が「鳴滝塾で同窓だつた人たちのことを回顧しましたら、感慨無量だつたらうと思はれます」（「鳴滝塾」『森銑三著作集』続編第2巻p.500）と述べている。

『赤い鳥』掲載作品については、勝尾金弥『森銑三と児童文学』（1987，大日本図書pp.37-54）に詳しい。

予定

26:2023/11/18（土）鈴木哲「森銑三と江戸風俗研究家・杉浦日向子(1958-2005)」

27:2023/12/16（土）神谷磨利子「森銑三著：日本少年文庫『徳川家康』（1920）を読む」